

令和元年6月14日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13160

研究課題名(和文) 歴史経験の身体性をめぐる思想史的研究

研究課題名(英文) A study on the physicality of historical experience

研究代表者

田中 純 (Tanaka, Jun)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：10251331

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究ではまず、文化史家アビ・ヴァールブルクの『ムネモシュネ・アトラス』に関する多面的考察を通じ、過去という時間性の身体的・感覚的経験としての「歴史経験」が有する多感覚・共感覚的な性格を解明した。その成果はさらに、C・セヴェーリが「キマイラの原理」と呼ぶ記憶術的思考やH・ブレデカンブの提唱する像行為論、および、B・ラトゥールのアクターネットワーク理論、さらにはH・ホワイトの歴史理論と理論面で関連づけられるとともに、パスカル・クニャールの文学、ネメシュ・ラースローの映画『サウルの息子』、デヴィッド・ボウイの歌など、芸術諸ジャンルにまたがる作品分析へと展開されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、アビ・ヴァールブルクをはじめとする歴史家・思想家・作家らにおける歴史経験を思想的な展望のもとで相互比較することにより、今まで漠然と想定されてきた歴史経験の様態・構造を明確化するとともに、それを身体論的に分析することを通じて、歴史経験が多感覚・共感覚性を帯びるメカニズムを解明している。これによって本研究は、現代社会においてさまざまな視聴覚メディアによって与えられている歴史表象について、その多感覚性を歴史的に位置づけ、評価する視座を開拓している。

研究成果の概要(英文)：Through investigating "Mnemosyne Atlas" of the cultural historian Aby Warburg, I clarified the multi-sensory and synesthetic characters of the "historical experience" as the physical and sensory experience of the past. Furthermore, I could link the results theoretically to C. Severi's analysis of "The chimera principle" as the art of memory, the image acts (Bildakt) theory proposed by H. Bredekamp, the actor-network theory of B. Latour, and the historical theory of H. White. As case studies, I analyzed the works across artistic genres, such as Pascal Quignard's literary works, Nemes Laszlo's movie "Son of Saul", David Bowie's songs, etc.

研究分野：思想史

キーワード：歴史経験 イメージ アビ・ヴァールブルク ムネモシュネ・アトラス ヴァルター・ベンヤミン 多感覚 共感覚 身体性

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降の歴史理論においては、H・U・グンブレヒトの『1926年』(1997)や『現前の生産』(2004)、F・アンカースミットの『崇高な歴史経験』、E・ルニアの『過去に動かされて』(2014)といった著作を代表として、「歴史経験(historical experience)」や過去の「現前(presence)」といったテーマが盛んに論じられてきた。この場合の「歴史経験」とは、或る時代の雰囲気や出来事の実感といった形で、過去の「現前」が身体的・感覚的に経験されることを言う。本研究の研究代表者は、平成21～23年度科学研究費(基盤研究C)「徴候的知」の系譜をめぐる思想史的研究、平成25～27年度科学研究費(基盤研究C)「徴候的知におけるダイアグラムの表現をめぐる思想史的研究」において、歴史家C・ギンズブルグが指摘した、太古の狩人の文化にまで遡る「推論的パラダイム」としての「徴候的知」の概念を、精神分析的な症候概念を反映させることで深化させ、さらに、その表現形態としてのダイアグラムについても研究を展開してきた。その過程で、徴候的知がとくに過去に関する身体的・感覚的経験としての歴史経験と深く結びついていることを見出し、本研究を着想するにいたった。

2. 研究の目的

本研究はアビ・ヴァールブルクやヨハン・ホイジンガのような歴史家のほか、思想家や作家らの具体的な歴史経験について思想的吟味を系統的に推し進めるとともに、先行研究においては十分に扱われていない、映画をはじめとする多様な歴史表象を対象を拡大し、身体論や感覚・知覚論の知見を活用することで、こうした経験のメカニズムのより厳密な分析を目指した。

具体的には次の3点を目的とした。

- (1) 歴史経験についての反省的考察を残している歴史家・思想家・作家における歴史経験の様態・構造をめぐる思想史的解明
- (2) 歴史経験の多感覚・共感覚性に関する、身体論の知見を援用した考察
- (3) 映画をはじめとする非言語的な要素を含む歴史表象における歴史経験を喚起する表現技法の分析

以上3点の研究成果にもとづき、最終的には歴史経験が生じる身体的・心理的メカニズムと歴史表象が歴史経験を媒介するプロセスを総合的に明らかにすることが本研究の目的であった。

3. 研究の方法

同時代人であるヴァールブルクとホイジンガの歴史経験に関する詳細な比較を行なうほか、ヴァルター・ベンヤミンや橋川文三をはじめとするその他の思想家・作家たちについても、それぞれのテキストから歴史経験の様態を読み取り、比較を通じて、そこに通底する構造を抽出した。その成果を精神医学や文化人類学などの見地を交えて吟味し、歴史経験の身体的・感覚的基盤について考察する。さらに、そこで得られた理論的知見にもとづき、映画をはじめとする具体的な作品分析に即して、歴史表象における歴史経験媒介のプロセスを明らかにし、本研究全体を総合した。

4. 研究成果

研究代表者は本研究初年度である2016年度にその主題に深く関わる単著『過去に触れる歴史経験・写真・サスペンス』(羽鳥書店)を刊行した。これは、「歴史経験」を解明するために、とりわけ写真を通じた過去との接触という出来事に着目し、さらに、その経験を伝達する歴史叙述のあり方を、「サスペンス」の原理のうちに探究した書物である。情動と深く結びついた歴史経験は、歴史理論において近年さかんに論じられているテーマであり、本書ではそうした理論を概観したうえで、思想史家・橋川文三と建築家ダニエル・リベスキンドの歴史経験を事例として検討し、さらにアーカイブ調査における著者自身の経験の自己分析を試みている。

「過去に触れる」経験の媒体として、本書でとくに焦点を絞って考察の対象としたのが写真である。これは、写真が過去の実在を端的に確認する物体として、19世紀半ば以降の歴史経験を深く規定しているからである。具体的には、アウシュヴィッツ第二強制収容所(ビルケナウ)で隠し撮りされた4枚の写真と、広島に原爆が投下された日に撮影された被爆地の写真5枚という、いずれも極限状況下で撮られた写真を取り上げ、写真を通してこうした限界的経験の場に接近することの可能性と倫理的問題を論じている。

本書はさらに、作中に写真図版を多用する手法で知られる作家W・G・ゼーバルトの作品と彼の文学観の関係、優れた写真論『明るい部屋』を著わしたロラン・バルトの思想における写真と歴史の相互作用などを通して、「過去に触れる」経験を与える歴史叙述のあり方を考察している。その分析過程で見出されるのが、映画や文学の「サスペンス」というジャンルを成り立たせている張り詰めた時間性の構造が歴史叙述においてもつ重要性である。本書はこの「サスペンス」の構造を、クリント・イーストウッド監督の映画『チェンジリング』から三部けいの漫画『僕だけがいない街』にいたるまで、さまざまな作品のうちに探っている。

以上の考察は、ヴァルター・ベンヤミンと多木浩二という二人の歴史哲学者における歴史経験、写真、歴史叙述の相互関係をめぐる分析を通じて総括され、固有の歴史経験に根ざした歴史叙述者の身体性や身振りの特性があぶり出されたうえで、歴史における「希望」とは何かという主題に収斂させられる。結論として、この「歴史における希望」というテーマを核とし、本書全体を10のテーゼに凝縮してまとめている。

研究代表者はさらに、とくにアビ・ヴァールブルクの歴史経験に関して、彼の最晩年のプロジェクトである『ムネモシュネ・アトラス』を中心に、本研究が目標としたヨハン・ホイジンガとの比較研究などを進め、2017年度に東京大学出版会から単著『歴史の地震計 アビ・ヴァールブルク『ムネモシュネ・アトラス』論』を刊行した。これは、ヴァールブルクが最晩年に手がけた、おびただしい図像のネットワークからなるプロジェクトである『ムネモシュネ・アトラス』を分析した書物である。ヴァールブルクが「図像アトラス (Bildatlas)」とも呼んだこのプロジェクトは、古代から20世紀にいたるヨーロッパの美術作品をはじめとするさまざまなイメージの図版千点近くを、黒いスクリーン上に配置した数十枚のパネルからなるシリーズである。本書における分析はおもに、ヴァールブルクの死によって残された「最終ヴァージョン」のパネル63枚(その記録写真)を対象としている。『ムネモシュネ・アトラス』を貫く二大テーマは、占星術などにおける星辰のイメージと、激しい感情に突き動かされた人間の身振り(ヴァールブルクはそれを「情念定型 (Pathosformel)」と呼んだ)である。『ムネモシュネ・アトラス』ではこの両者が、ときには相互に関係し合いながら、おおむね時代の流れに沿うようにしてたどられている。

本書では、『ムネモシュネ・アトラス』最終ヴァージョンの全体構造を巨視的に把握することを試みた。そうした構造が第一章で「『ムネモシュネ・アトラス』の周期表」や「ヴァールブルクの天球」というダイアグラムで示したパネル相互の関係性である。個別のパネルについては、パネル46とパネル79の詳しい分析を例示として収めた。著者はパネル写真を実物大で再現した展覧会を2012年に開催しており、本書ではこの展覧会の企画意図と構成を記録するとともに、その折りに『ムネモシュネ・アトラス』と同じ方法によってあらたに作成したパネルについて解説を加えている。この新作パネルでは、「ニンフ」と「アトラス」という二つの主題系が、ヴァールブルクの死以後の時代のイメージへとどのような系譜をかたちづけているかが示されている。また、ヴァールブルクに関するジョルジュ・ディディ＝ユベルマンの二冊の大著をめぐる批判的解題により、この論者の思想を介して『ムネモシュネ・アトラス』およびヴァールブルク研究の将来的展望を切り開くことを試みた。

エピローグでは、『ムネモシュネ・アトラス』を通して浮かび上がる、歴史家ヴァールブルクの歴史経験を集中的に考察した。そのとき導き手となったのは、ヴァールブルクがブルクハルトやニーチェ、そして自分自身を譬えた、過去からの「記憶の波動」を感知する「地震計」という比喩である。この地震計は身体のあるゆる感覚を研ぎ澄まし、微細な「歴史の震動」をとらえようとしていた。ヴァールブルク特有の感覚経験や身体性がそこで注目されるべきものとなる。このエピローグにおける議論は、先行する『過去に触れる』の内容と深く関わり、本書のヴァールブルク論を前著の歴史経験論へと架橋している。

最終年度である2018年度には、ヴァールブルクの『ムネモシュネ・アトラス』における歴史経験の諸相を、C・セヴェーリが「キマイラの原理」と呼ぶ記憶術的思考やH・ブレードカンブの提唱する像行為 (Bildakt) 論、および、B・ラトゥールのアクターネットワーク理論、さらにはH・ホワイトの歴史叙述論と結びつけた論考を執筆した。この論考は、研究代表者が編者のひとりとなって編まれた、総合的なイメージ学の論集『イメージ学の現在 アビ・ヴァールブルクから神経系イメージ学へ』(東京大学出版会、2019年)に発表され、さらにそのドイツ語版は、これも同様に研究代表者が編者を務めた同趣旨の論集『*Bilder als Denkformen: Bildwissenschaftliche Dialoge zwischen Japan und Deutschland*』(De Gruyterより近刊)に収められることになっている。

2018年度にはさらに、ヴァルター・ベンヤミンの歴史経験論の吟味を通じてその重要性を発見した思想家フローレンス・クリスチャン・ラングに関し、ベルリンでアーカイヴ資料を調査した。ラングは『ドイツ悲劇の根源』執筆時のベンヤミンに多大な影響を与えており、それ以前にはミトラス教研究をはじめとする古代ヨーロッパの宗教をめぐる独自の思想を展開した人物である。そのミトラス教研究はヴァールブルクの弟子ザクスルによる研究の先駆をなす点でも注目される。

こうした理論的考察と並行しつつ、2018年度は、文学、映画、写真、音楽を媒介とした歴史経験についての作品分析を進めた。文学では来日した小説家パスカル・キニャールと対話の機会をもち、その作風と『ムネモシュネ・アトラス』との共振関係について議論した。映画ではネメシュ・ラースローの映画『サウルの息子』の「触感的 (haptic)」な視聴経験に関する論文を執筆し、写真では東松照明や牛腸茂雄を中心とした論考を準備した。またあらたに音楽における歴史経験を論じるため、デヴィッド・ボウイの楽曲について、とくにその歌声を歴史経験論における色彩の問題と関連づけ、詳細な作品分析を進めている。その成果は単著にまとめられる予定であり、2019年度中の刊行を目指している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計18件)

田中純、「歴史のゴースト・プラン 宇佐美圭司の思想の余白に」、『UP』557、査読無、2019、37-44。

田中純、「不死のテクノロジーとしての芸術 生政治のインスタレーション」、『UP』554、

査読無、2018、46-51。

田中純「物質論的人文知（ヒューマニティーズ）としての「野生の考古学」 同時代への退行的発掘のために」、『現代思想』46（13） 査読無、2018、150-159。

田中純「歴史叙述における「キマイラの原理」 カルロ・セヴェーリ『キマイラの原理』、ティム・インゴルド『メイキング』ほか」、『10+1 web site（2018.01） 査読無、2017。

田中純「見えない瓦礫を投げる 「蜂起」の身振りをめぐって」、『UP』545、査読無、2018、26-33。

田中純「死者の像の宛先 スーザン・ソクタグの亡骸」、『UP』542、査読無、2017、43-49。

田中純「朔太郎の青 W・ベンヤミンを補助線として」、『UP』539、査読無、2017、47-53。

田中純「イメージを喰うサトゥルヌス ヴァールブルクとゴヤ」、『UP』536、査読無、2017、47-53。

田中純「ネロ／ペルセウス 斬首された「自由」のイメージをめぐって」、『UP』533、査読無、2017、46-52。

田中純「モンタージュ／パラタクシス（完） 「歴史の地震計」のヘテロトピア」、『UP』530、査読無、2016、38-43。

田中純「モンタージュ／パラタクシス（3） マックス・エルンスト《主の寝室》の「皮膚」について」、『UP』527、査読無、2016、55-61。

田中純「モンタージュ／パラタクシス（2） テオ・アンゲロプロスの映画における「空舞台」をめぐって」、『UP』524、査読無、2016、42-49。

〔学会発表〕（計3件）

田中純「歴史あるいは夜」 国際シンポジウム「パスカル・キニャールとの対話」（国際学会）2018。

田中純「歴史の Ghost Plan 宇佐美圭司の思想（の余白に）」、『ワークショップ「宇佐美圭司《きずな》から出発して」』2018。

田中純「デヴィッド・ボウイのノにおける死 Rock Death から Nachleben へ」、『表象文化論学会第11回大会・企画パネル「デヴィッド・ボウイの宇宙を探查する」（招待講演）』2016。

〔図書〕（計6件）

田中純『歴史の地震計 アビ・ヴァールブルク『ムネモシュネ・アトラス』論』、東京大学出版会、2017、全376頁。

田中純『過去に触れる 歴史経験・写真・サスペンス』、羽鳥書店、2016、全600頁。

6. 研究組織

(1) 研究分担者 なし

(2) 研究協力者 なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。